

さらば星座

濁流の巻・上

黒岩重吾



さらば星座

濁流の巻

上

黒岩重吾

さらば星座 濁流の巻 上

一九七七年一〇月二五日 初版発行

一九七七年二月一五日 二版発行

定価 七八〇円

著者 黒岩重吾

装丁 横手由男

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五―一〇
郵便番号 一〇一

電話 出版部 (〇三) 二三〇一六三六
販売部 (〇三) 二三〇一六一七一

印刷所 大日本印刷株式会社
検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたします

目

次

初めての決闘
母からの手紙
小さな逃亡者
女寄峠の星
眠られぬ夜
終戦の日
勝てない喧嘩
闘った後で
焼跡の街
闇の底に
裸になった日
奪われた自由
脱出

九 六 三 元 五 四 三 二 一 七 八 六 五 四 三 二 一

生きる意味	一〇
埋もれた階段	一〇
泥棒と群衆	一七
見付けた相手	二四
夜の逃亡	三〇
執念の復讐	三七
復讐の後で	三三
金ボタンとの訣別	四〇
桜見物	四四
潰れたねぐら	五一
老人の死	一六
垢を落すな	一七
孤猿	一七

違った会話	一八〇
夏の夜	一八六
大人との闘い	一九三
昔の挨拶	一九九
縄張	二〇六
卑怯な野望	二二三
卑劣な嘘	二二九
糞との闘い	二三六
宙吊り	二三三
脱出した夜	二四〇
梅田の夜	二四四
山中の収容所	二五三
死の演技	二六〇

搜索者	二六五
誇りと魂	二七三
淀川の朝	二七六
春を迎えて	二八五
別離の日	二九三
炎の中で	二九六
泥酔の日々	三〇五
芽生え	三一

搜索者	二六五
誇りと魂	二七三
淀川の朝	二七六
春を迎えて	二八五
別離の日	二九三
炎の中で	二九六
泥酔の日々	三〇五
芽生え	三一

さらば星座

濁流の巻
上

初めての決闘

1

昭和二十年八月の初旬、春日正明は降るような星明りの下で、腰まで小川につき、古びたとんぼ取りの網で、小魚を獲っていた。

だが今夜に限って一匹も獲れない。

空腹と疲労で、正明は網を放ると草叢を押し分け、小川の岸辺に寝転んだ。

母に会いたかった。一体母はどうしているのだろうか。この二ヶ月間、母から一度も便りが無い。正明が出した手紙も、届いたのかどうか分らなかった。

大阪が三月の大空襲で廃墟になったのは薄々聞いていた。これまで住んでいた天下茶屋の家も焼けたらしい。だが母は無事で焼跡に住んでいる、という便りが来ていたのだ。

……正明と会えるのを楽しみに、お母さんも頑張っていますから、正明も負けずに頑張って下さいね……

手紙の最後に、母は何時^{いつ}もそう書いて、正明を励ましてくれた。その母から、この二ヶ月ぶつり音信が途絶えたのだ。

仰向けに寝転んで星を眺めていると、昭和十五年、父が召集されるまでの楽しかった日々の生活が走馬燈のように流れて行く。

その父も南方で戦死してしまった。

秋の虫がうるさい程鳴いている。

お母ちゃん、会いたいよう、おなかがい^すいたよう、と正明は胸の中で呟いた。

だが正明は疎開で津川家に來てから、その言葉を口から出したことは一度もなかった。

人前で泣くな、人前で弱音を吐くな、と父は絶えず正明にいつていた。うるさい親父だ、とその度に反撥したが、他人の家に世話になった途端、その言葉だけが、汗臭い父の体臭のように胸の中で生き返ったのだった。

川岸の灌木の傍を螢が青白い光を明滅させながら飛んでいる。

小川の西方は段々畠になっていて西山と呼ばれる山麓まで続いていた。西山の左側に、海拔九百^{イッぱう}米の龍門岳があった。

南は丘陵だが、次第に高くなり、吉野に続く。吉野の奥は、大峯、山上ヶ岳など二千米近い峻嶒がそそり立っ

ている。

螢は灌木の下で明滅し、その淡い光が小川に映っているが、正明には、螢など取る気は起らなかった。空腹で腹が痛むのだ。

正明は起き上ると、網を灌木の下の方底に静かに置いた。この場所にはよく小鮒が集る。苦勞して正明が見付けた秘密の場所であつた。だから正明は誰にも喋らず、お峯の眼を盗んで獲りに来るのだつた。

この山間の盆地には田畑が多いので、大阪程食糧難は酷くはないが、統制が厳しく、農家の連中でも、供出米から、自分達の分を確保するのに必死であつた。

子供達の中には、畑の作物を盗んだりする者もいるが、正明はまだ盗んだことがなかった。この頃は、そういう盗みに対する見張りが厳しい。万が一見付かり、捕まつた時のことを思うと、どうしても出来ないのだ。

制裁が恐いのではない。

お峯に何をいわれようと耐えられる。

これ程飢えながら正明が盗みをしたのは、母の爲だつた。お峯は当然母に告げるだろう。それを知つた母がどんなに悲しむか、と思うと、どうしても出来ないのだつた。

何時の間にか、向うに飛んで行つた螢がまた戻つて来た。その時、灌木の下の静かな川面に白く光つたものが

見えた。

螢の光ではない。間違ひなく小鮒で、正明が川底に置いた網の上あたりであつた。

正明は息を停めると、草が触れ合う音を警戒しながら、両腕で身体を支え、ゆっくり起き上つた。棘のようなものが掌に突き刺さつたが、正明は掌を動かさなかつた。

掌の痛みより飢えの方が強いのだ。

正明は音を立てないで上半身を起すと、網の柄を握み、昆虫でも取るように力一杯川から草の上に叩きつけた。

網は一瞬間の中を唸りながら空を切つた。勿論、網の中に魚が入っているかどうかなど、暗闇だし、一瞬の間なので分らない。

だが網の手応えが違ふ。間違ひなく何匹かの小魚が獲れている。

正明は網の傍に飛んで行つた。

二匹の小鮒が網の中で撥ねていた。

正明の腹が鳴り、今にも涎が落ちそうである。正明は大急ぎで木片を集めると火をつけ小鮒を串で刺して、焼いた。

魚が焼ける香ばしい匂いを嗅ぐと、腹の底から胃と腸がせり上つて来るような氣がした。

正明は小さな薬瓶に入れた醬油を小鮒に振り掛ける
と、ナイフで内臓を出し、頭から骨を噛み砕きながら食
べた。

小魚の骨は普通は喉に刺さる危険性があるが、正明の
場合、細い骨まで口中で噛み砕くので、喉には刺さらな
い。また長い間噛んでいる時の味覚が何ともいえないの
だった。

二匹の小鮒を食べ終ると、腹の皮が背骨にくっつきそ
うな飢餓感が少し薄らいだ。

正明の表情が柔くなり、彼は草叢の上に足を投げ出
して坐ると、ぼんやり、薄墨色に星明りを切り取ったよ
うな龍門岳を眺めた。

丁度龍門岳と西山の間の夜空に薄雲がたなびいてい
た。

北斗七星は真上にあつた。星座は季節や時間によつて
移動する。

夏の夜のこの時刻の北斗七星は夜空の高い場所に見え
る。そして北斗七星と対照的に低い場所にあるのが、カ
シオペア座だ。北極星はこの中間にあつて動かない。

時間が経つて、北斗七星は次第に低くなり、反対にカ
シオペア座が高く上つて来る。

正明は星を眺めるのが好きだった。

国民学校三年頃から、夜空の星の美しさに魅せられ、

父にせがんで望遠鏡を買つて貰い、屋根に登つて星を眺
めたものである。

現在、正明は国民学校の五年生だった。

この奈良県の山間の盆地に親類の津川修造がいたの
で、大阪の天下茶屋から昨年疎開して来たのだった。

疎開といつても、今の若者には縁のない言葉かも知れ
ない。当時の日本は太平洋戦争の終期で、大都市は米軍
の爆撃下に廃墟と化し、そこに住む国民学校の生徒達
は、爆撃されそうにない地方の田舎に、集団で移住させ
られたのだ。当時、それを疎開といった。

ただ、地方に親類のある者は、本人の希望で、親類の
家に行くことが出来た。

勿論その場合は、親類が希望者を受け入れてくれねば
ならない。

正明の場合、幸い父の従弟が奈良の南部の盆地にい
て、正明が自分の家に来ることを承諾してくれた。そう
いう親類のない者は、遠く、東北、中部、四国などに分
散して疎開させられた。

そのおかげで、少年少女達は空襲に遭わず、生命を全
うすることが出来たのである。

だが都会から疎開して来た少年少女達が、地元の少年
達に苛められ、食物も少なく、苦しく怪しい生活を送ら
なければならなかったのも、仕方のない成行きだった。

正明を受け入れてくれた津川修造は材木商で氣は荒いが、心の底は暖かい男で、正明を家族同様に扱ってくれたが、十九年三月、修造が召集され、軍隊に入ってから、津川家の正明に対する仕打ちはがらりと変った。

修造の細君のお峯は、正明を邪魔者扱いにし、食事の量も、自分達の子供とは差別した。正明は朝早くから起きて家の掃除をさせられ、学校から帰ると、容赦なくこき使われた。津川家には中学二年の良雄と国民学校三年の美江子がいた。

共に食べ盛りである。材木商をしていた関係で修造がいた間は、食糧の点ではそんなに不自由がなかったが、修造が召集されてからは、津川家も配給以外の食糧を得るのに、苦労するようになった。

お峯が正明と、自分の子供をはっきり区別するようになったのも当然かもしれない。

お峯は、掃除の仕方が悪い、怠けている、と何かと理由をつけては、正明の食事をけずった。だから正明は絶えず、空腹をかかえ、お峯の眼を盗んでは山に行き、木の実を取り、小川で小魚を獲ってはその場で焼いて、むさばり食って飢えをしのいだのである。

戦争が終れば母に会える、ただそれだけを夢みて毎日を通していった。

正明が音信の途絶えた母を思いながら、夜空を眺めて

いると、子供達の話し声と、勢い良く道を歩く音が聞えてきた。

その話し声の中に、正明はクラスの餓鬼大将である吉岡の、もうすでに声変りした囁れたような声を聞いた。

「この辺りやで、魚が居るのは」
と吉岡はいった。

正明は起き上ると本能的に燃え残った枯木を掴んだ。

2

正明のクラスメイトは三人いるようだった。吉岡の乾分達である。彼等は何かあると、余所者が俺達の飯を食べている、と正明を苛めている連中であつた。

なかでもボス格の吉岡はまだ五年生なのに、身長が百五十糎もあり、腕力が強い。

正明はこれまで、何度吉岡達に擲られたり、石をなげられたりしたか分らない。

その度に正明は歯を喰い縛りながら我慢して来たのだ。吉岡を敵に廻すと、クラスメイトの殆どを敵にしなければならぬ。

中学校に入るまで、後一年半の辛抱である。中学校なら、大阪の中学に入学出来る。

だから、正明は幾ら馬鹿にされたり、苛められても我

慢して来たのだった。

そんな正明が思わず枯木を握ったのは、

「おや、魚を焼いた匂いがあるぞ」

という言葉葉を耳にしたからだった。

案の定、彼等は鼻を鳴らしながら正明の方にやって来た。

吉岡は樵の子供である。腕力はあるが、農家の子供ではないので、矢張り食糧不足で飢えていた。畑を荒らし廻っているのは吉岡とその乾分達だ。彼等は彼等なりに畠の作物で飢えを満たそうと必死だったのである。

吉岡達は、正明が自分達以上に飢え苦しんでいるとは思ってもいない。

大阪からやって来て、自分達が生れた土地の米を食べている、許せぬ余所者と思っているのだ。だから正明を苛めるのである。

正明は枯木の棒を握ったまま腹這いになると、音を立てないように後ろに下った。

十米程這った時、吉岡達は、正明が小鮎を焼いた燃え残りの木を見付けたのだ。

「ここで、魚を焼きよった」

と吉岡がいった。

「まだ煙が立ってるがな」

そういった一人が、焼けて半ば灰になった木片の中に

手を突っ込んだらしい。

「熱っ！」

その少年は大きな悲鳴をあげた。

「静かにせえ、誰か居るぞ」

吉岡は流石にボスらしく、正明の存在を嗅ぎ取ったようだった。正明は三人が一斉に伏せるのを見た。畑荒らしに慣れているので、彼等の動作は敏捷だった。

草が揺れている以外、彼等の姿は見えない。多分吉岡達は、十米先に伏せているのが正明ではなく、畑荒らしの監視人と勘違いしたのかもしれない。

正明は自分が手に握っている木の枝を見た。

握り締めてみると細くて、喧嘩の際、役に立ちそうもないようだった。正明は息を停めて伏せながら周囲を探った。丁度野球のボールぐらいの石が見付かった。

正明はその石を確り握り締めた。

何時も、苛められても、じっと我慢している正明が、三人の強敵を相手に闘う気を起したのは、食物のせいだった。

彼等は正明を見付けたなら、当然正明が鮎を獲り、焼いて食べたことを知るだろう。

それだけなら良い。だが彼等は、正明が何処で鮎を獲ったか白状させようとするに違いなかった。

白状など、正明には出来なかった。

どんなに擲られても、自分が見付けた秘密の場所を吉岡達に白状する気にはなれない。

とすると、自分を守る為には闘う以外にはなかったのだ。

その後正明は、焼土と化した廃墟の大阪に帰り、ただ食う為にだけ、野獸のように街をうろつき、檻に入れられては脱走するという毎日を過したが、食物の為に牙をむいたのは、この夜が初めてであった。

吉岡達は どうしているのか、星明りに草のゆらめきがゆっくり近付いて来るのが、正明にははっきり分った。三人か、それとも一人か、それは分らない。ただ彼等が様子を探る為に徐々に近付いて来ていることだけは確かだった。

正明は相変らず石を握ったまま伏せていた。相手が三米程、手前に来た時、正明は斥候としてやって来たのが一人なのを知った。

正明は思い切り息を吸い込み、撥ね起きると猛然と突進した。

匍匐前進して来た相手が吃驚して立ち上ろうとした時、正明は相手の顔めがけて思い切り石を叩きつけていた。

正明は人間が、こんな悲鳴をあげるのを初めて知った。それは悲鳴とも叫び声ともいえない異様な声であった。

た。

相手は仰向けに倒れ、正明はそのまま窪地の中に飛び込んでいた。

正明は吉岡達が攻撃するのを予期したが、思い掛けず、残った二人も訳の分らない声を発しながら逃げ出したのだ。

正明に擲られた相手は、どうしたのか妙に静かだった。正明は窪地に伏せたまま、相手が立ち上るのを忍耐強く待っていた。

まさか相手が氣絶しているとは、夢にも思わなかったのである、余り静かなので正明も次第に氣持悪くなり、立って倒れた相手を覗き込んだ。

正明の石の一撃は、田代という吉岡の一の乾分の額を割っており、おびただしい血が流れていた。田代は眼を閉じたまま動かない。

正明は田代が死んだ、と思った。

途端に恐怖に身体がすぐんだが、水をぶっつけたなら、ひよつとしたら生き返るのではないか、と思い網を持続たまま小川めがけて走った。

小川の傍まで走ってきた時、正明は下草に足を取られ勢い良く転倒した。

それが合図のように田代は息を吹き返し、
「痛いよう、痛いよう……」